

民間在庫 277 万ト>に膨張 3 月動向 集荷・契約増も販売鈍化

農水省は 4 月 30 日、3 月時点における米穀流通の動向について集計を発表した。令和 7 年産米（水稻うるち）の集荷数量は前年比 2 割増の 266 万 1000 ト>。卸などの契約数量は前年比 1 割増の 239 万 5000 ト>だが、引き取りが前年比で 1 割減と進まず、販売数量は 100 万 1000 ト>どまり。民間在庫は、前年を 5 割超過して、277 万ト>にまで膨らんでいる。

集荷数量は 4 年産水準まで回復している。概算金など集荷価格の引き上げと大口生産法人との契約強化などが奏功したようだ。ただし、300 万ト>台を維持していた平成 28 年産までと比べると、退潮感が否めない。

契約数量も令和 4 年産レベルまで戻している。「令和のコメ騒動」を受けて産地との関係強化が目指され、卸などからの契約が積み上がったものとみられる。

一方、販売は鈍化傾向が鮮明。7 年産のデータ発表が始まった昨年 9 月以来、7 カ月間、販売数量が前年同月割れを続けている。パン・麺への需要シフトや業務用使用量の減少（量目変更・外国産米使用）などが影響しているようだ。

緊急対応だったとはいえ、昨年 3 月から 59 万ト>が放出された“備蓄米によるいわば”民業圧迫”と、これも急場凌ぎだった外国産輸入米（SBS・民間各 10 万ト>）と 7 年産民間玉とが競合した影響は極めて大きい。

民間在庫は昨年 5 月以降、11 カ月連続で前年同月超えが継続している。令和 4 年同月のコロナ禍による外食需要減退を背景とした 270 万ト>を優に超える高水準にある。

① 集荷業者のコメの産地別集荷・契約・販売状況の推移（万玄米 t）

年産	集荷	契約	販売
平成26	342.1	263.4	143.1
27	304.7	263.6	133.2
28	300.4	262.7	137.1
29	283.8	248.6	132.5
30	275.2	251.0	126.8
令和元	282.6	252.5	134.2
2	292.4	234.4	112.4
3	284.9	243.7	111.3
4	264.4	236.2	109.8
5	251.5	232.6	113.7
6	225.0	221.2	115.0
7	266.1	239.5	100.1
前年差	+41.1	+18.3	▲14.9
前年比	18%	+8%	▲13%

（注）いずれの年産も、出回りから生産年 3 月末までの累計

② 出荷・販売段階別の民間在庫量（万 t）

	7年 3月末	8年 3月末
出荷段階	135	208
対前年差	▲36	74
販売段階	45	69
対前年差	+2	+24
合計	180	277
対前年差	▲34	+97

（注）①出荷段階は玄米仕入量 500 t 以上の集荷業者など
②販売段階は玄米仕入量 4,000 t 以上の卸など
③8 年 3 月末は、売り渡した備蓄米 400 t も含む